

蔵王慰霊登山に感動の余韻 卒寿祝いの色紙とメモリアル登頂

2006年12月4日

(文) 千葉 英之 (高4回)

(写真) 清野 英一 (高6回)

国安 泰致 (高4回)

2006年12月2日。快晴の朝、電話が入った。「今日、90歳の誕生日を迎えました。仙台二高の皆さんのおかげで、生き長らえています。先に頂戴した卒寿祝いの色紙の、一言一言を読み返しては感動しています。有難うございました」-----蔵王慰霊登山の主人公、渡辺宏翁（神奈川県厚木市在住）の、しっかりした口調だった。渡辺さんは卒寿を迎えて、なお食欲旺盛で、気力、体力も充実し、いたって元気に日々を過ごし、「90過ぎても、もう一度登りたい」という夢を持ち続けているほどである。

さて、この秋は、慰霊登山のサポートに中心的役割を果たした仙台二高と新潟・柏崎高の同窓生の有志が、渡辺さんの卒寿の祝いと、鎮魂の想いを重ねて、ささやかながら、心を込めた、二つの企画を実行に移した。当事者の一人として一筆し、ご報告したい。

まず、蔵王慰霊登山の経緯については、既に、北社会と二高のHP、さらには同窓会報を通じて数度にわたり、お知らせしたので、ここでは詳述を避け、手短かに説明したい。

母校開校以来の最大の悲劇といわれる、蔵王遭難事故は1918年10月23日に起きた。旧制仙台二中の修学登山隊が、熊野岳付近で悪天候に見舞われ、生

徒7人と教諭2人の命が奪われたのである。当時の渡辺文敏校長は引責辞任し、生涯、遭難者の供養と鎮魂の日々を送った。渡辺宏翁は、文敏校長の三男で、父の遺志を引き継ぎ、人知れず蔵王を訪れては、慰霊登山を続けていた。

それが、初めて二高側に知らされたのは、宏さんが5回目の慰霊登山を計画している時点だった。柏崎高校(文敏校長の前任校)のOB、松浦孝義さん(東京同窓会事務局長、高7)から筆者(千葉)経由で、その情報が二高側に伝えられたのである。

二高側は、学校と同窓会が、ただちに呼応し、挙げて5回目の慰霊登山を支援する体制を整えた。そして、2004年10月16日、二高山岳部OBを中心としたサポートチームに支えられながら、宏さんは5回目の慰霊登山を成功させた。熊野岳の山頂で、慰霊碑に合掌し、感涙にむせぶ宏さんを包み込むように、サポートチームが斉唱する二高校歌が、静に流れて行ったのである。

5回目の慰霊登山は、宏さんが87歳の時だった。それから3年が過ぎ、卒寿を迎えることとなった。そのお祝いに、寄せ書きの色紙を贈ることが決まったのは、筆者(さいたま市在住)が、仙台の実家の墓参りに行った折に合わせて、慰霊登山の同志と久しぶりに懇談した時(10月11日)のことだ。清野英一さん(高6)、大友一郎さん(高6)、我妻道也さん(高4)の3人の諸兄と、席を共にし、衆議一決となった。

その翌日、筆者は山形に行き、サポート隊長をつとめた月田文和さん(高4山岳部OB)と会い、快諾を得た。その際、月田さんから、これとは別に、メモリアル登山の案も出され、すぐ実行されたが、これについては後述する。

挿絵は甲子園出場の名一塁手

まず、色紙の中央には、蔵王山麓で画廊を開く我妻征光さん（高9）が水彩で、お釜に青い水をたたえた蔵王の風景を描き、「祝 渡辺翁卒寿」の筆。

（註：我妻征光さんは、野球部で大活躍。甲子園でベスト8に進出した時の一塁手（6番）である。我妻道也さんは兄で、兄弟揃って慰霊登山に随伴した）

そして、その蔵王の絵を囲み、有志の皆さんが万感を込めて、書き込みをしている。以下、敬称略で紹介しよう。

* 高橋 正道(高3):「良き伝統を思い起させていただき、感謝で一杯です」

（註：高橋さんは当時の同窓会副会長で、蔵王慰霊登山プロジェクトの総指揮を執った）

* 月田 文和(高4):「みちのくを ふりわけざまに そびえたもう 蔵王の山の雲の中に立つ。渡辺さんに会えて、蔵王は二中、二高の山と、改めて実感しました」

（註：月田さんは、遭難者33回忌碑を制作した八幡町の月田石材店の子息である。これを、月田さんを含む当時の山岳部員が頂上に背負い上げた）

* 大友 一郎(高6):「私の人生で、最高の感動と幸せを----。ありがとうございました」

（註：大友さんは母校創立100周年と、遭難者80回忌に合わせて、同窓会の担当役員として、遭難者の墓地の確認と、遺族の消息を追い、克明なりすとを作成した。なお大友さんと清野さんは、二高同窓会代表として、04年5月17日に、柏崎高を表敬訪問し、渡辺・初代校長の追徳碑に献花している）

* 我妻 道也(高4):「霧深き蔵王に歌いし、鎮魂の校歌、友垣、永遠に忘れじ-----。いつまでも、お元気で！」

* 清野 英一(高6):「九合目ですね。頂上(百歳)めざしガンバロー。登山で大事なこと----無事下山(百歳後)。庄内魂でガンバラネバ庄内！」

(註: 渡辺宏さんは庄内藩士の末裔。渡辺家に家宝として伝わる貴重な武家古文書多数を、慰霊登山支援のお礼として後日、二高図書館に寄贈した。)

* 安積 壮吉:「皆さんに、感謝」

(註: 安積さんは遭難者遺族の代表として、一連のセレモニーに参加した)

* 鈴木 壮夫(高11):「蔵王池の傍で“文武両道”を思う。これが唯一の心の支えです」

(註: 鈴木さんは、東京同窓会懇談会「北社会」の世話人代表。04年6月例会に、渡辺翁を講師に招き「蔵王遭難の父---男の生きざま」と題して、一部始終を明かしてもらい、慰霊登山支援活動の先鞭をつけた。)

* 国安 泰致(高4)「縁の妙。中西利徳の孫」

(註: 中西利徳先生 = 国漢担当 = は、渡辺校長の前任校、旧制柏崎中(現在柏崎高)以来の腹心の部下。校長に伴って旧制仙台二中に赴任。退職後、青葉神社の神主となった。国安さんは、その孫にあたるという奇縁)

* 松浦 孝義(柏崎高7)「蔵王を思い出します。大いに長生を願っています」

(* 柏崎高OBの松浦さんは、旧制柏崎中の初代校長であった、渡辺校長の足跡を追っているうちに、旧制二中の蔵王遭難事件で引責辞任したことがわかり、さらに三男の宏さんと接触し、全容を突き止めた。この情報を筆者に

伝えたのである。松浦さんは二高側の一連の慰霊プロジェクトに、柏崎高同窓会代表として、二度来仙して参加し、蔵王慰霊登山にも随伴している)

* 千葉 英之(高4)「悠久!心の架け橋。仙台二高―蔵王―柏崎高」

二高創立110周年にもう一度!

色紙を届けるアンカー役は、首都圏在住の国安泰致、松浦孝義の両兄と筆者の3人に回ってきた。卒寿の誕生日の前週、11月28日の昼に、ご自宅近くのレストランで、渡辺宏・俊子夫妻に久しぶりに、お会いし歓談した。お互い、つる話が、なかなか尽きず、4時間余りに及ぶ長丁場となった。

俊子さんは今年8月に77歳の喜寿を迎えていて、夫妻には二重のおめでたとなった。「八十路越え 共に手を取り 迎る坂道」――宏さんは、席上、こんな自筆の書を示し、夫妻の心境を明かした。

色紙を贈られた宏さんは、ただただ感激の面持ち。「まったく予期していなかった贈り物。ほんとうに有難いことです。真ん中の蔵王の絵がカラーで描かれていて、とてもきれいですね。写真で見る以上に胸を打たれます。思い出がぎっしり詰まっている山です」と、懐かしげ。

そして、寄せ書きについては、ゆっくり、ゆっくり目を通す。「お一人、お一人、よく、お顔を覚えていきますよ。感慨深い、お言葉が並んでいますね。これほどまでに、至らぬ私を支え、なお力強く激励してくださる皆さん。涙が枯れるほど嬉しく、感動しています」

そして、今後については「事情が許せば、元気なうちに、毎年でも登りたいのですが-----、特に目指しているのが4年後の2010年なのです。この年に、仙台二高も、柏崎高も、共に創立110周年を迎えます。できれば、もう

一度、皆さんのお力添えを得ると、勝手ながら思っているのです。でも、年ごとに体力が落ちていることは自覚しているので、どうなりますことか？」

この発言について、俊子さんは「まあ、夢を持ち続けることが、生きがいになるのでたしら、結構でしょう」と、にこやかに応じていた。

さて、渡辺家の近況だが-----。これまで、夫妻二人だけの暮らしたが、今年から、同居の家族が一人増えた。サラリーマンで、転勤族だった長男の康一郎さんが、東京本社勤務となり、帰ってきたのである。「これで、とても安心しました。何かにつけて-----」と俊子さん。

康一郎さんは、宏さんの4回目の慰霊登山(90年8月)の折に、俊子さんと一緒に随伴し、頂上の慰霊碑に線香をたむけている。「祖父の遺志を孫に伝えたい」という父、宏さんの気持ちを受け止めての同行だった。渡辺家三代に伝わる慰霊、鎮魂の遺志に、感動を禁じ得ない。

宏さんは、5回目の慰霊登山の前日に、二高で行なわれた遭難者の供養式典で「どうか、父(文敏校長)を許してください」と、涙ながらに訴えたが、誰が、それを責められるのだろうか? 遭難当時から、責めた人はいないし、今後とも責める人はいないだろう。

「渡辺腰掛の岩」に校旗

色紙の寄せ書き集めに併行して、メモリアル登山が行なわれた。

慰霊登山サポート隊長の月田文和さんの提案だった。筆者が山形で会った時に、それを聞かされた。5回目の慰霊登山の日(04年10月16日)は、ちょうど文敏校長の命日でもあった。文敏校長は晩年、初代校長をつとめた旧制柏崎中に招かれ、全校生を前に講演中、演壇で倒れ帰らぬ人となった。柏崎高の

同窓会誌に、蔵王遭難と合わせて「生涯、二度の悲劇に会った校長」と言い伝えられている所以である。

月田さんは、このことを、よく承知していて「遭難者と合わせて、文敏校長の供養にもなるので、10月16日に登ろう」と言い出したのである。といっても、筆者と会った4日後に、その日が迫っていた。人を集めるのに時間がなさ過ぎると思ったら、「急なことなので、山岳部後輩の清野君と二人だけで登りたい。清野君を誘ってくれないか？」という指示。そのことを伝えたら、清野さんが快諾、ただちに実行に移された。（註：この件は、近刊の二高同窓会報に、清野さんが寄稿しているので、参照を）

月田、清野両兄からの報告によると-----。その日は「天気晴朗なれど、風強し」で、時折、ガスが立ち込めて、視界が遮られたが、コンディションは良好。

熊野岳の慰霊碑に、持参した月田家の庭の花を捧げて合掌したとのこと。その場で、二人が話し合い、この日を「渡辺登山の日」と名づけ、毎年、継続して登ることに決めたという。この件について、清野さんは同窓会報で、広く賛同者を募っている。その前に、クチコミで知って、名乗りを挙げてきた山岳部OBの仲間もいるというので、来年からは、二人だけのメモリアル登山では、なくなりそうだ。

さて、出発前に「何か注文はないか？」と月田さんから、メールが入った。そこで思い出した。宏さんの登山に随伴した時、宏さんは、周囲の心配をよそに、すこぶる元気に、杖一本で、すたすたと歩き、途中一度、休憩しただけだった。具合のいい岩に腰を掛け、月田隊長が差し出すコーヒーを美味しそうに口にふくめた。その姿が印象的だったので「その岩の写真を撮ってほしい」と、

筆者から返信した。

清野さんが、デジカメで撮影した、その岩の写真が送られてきた。「渡辺腰掛の岩」というキャプション付きで。なるほど、二高OBの山男たちには、新しい名所になるかも？と思ったりもした。

ほかの写真の中には、山頂で「庄内士魂と共に！北陵健児」と大きく書き込んだポスターをかざしたツーショットもある。庄内藩士をルーツに持つ、渡辺家へ敬意を表し、明治生まれの文敏校長と、大正生まれの宏さんの気骨をたたえたものだろう。

後世に伝える臨場感に満ちた記録

さて、慰霊登山の後、支援のお礼と記念にと、渡辺宏さんは、代々家宝として伝わる庄内藩ゆかりの古文書60点を二高図書館に寄贈した。この中には幕末、明治維新の、日本の激動、変革の時代を垣間見ることができる記録、絵図類も多数含まれている。生徒たちが、日本の中世、近代史を、東北の視点から学ぶための貴重な教材になるに違いない。この古文書類の贈呈式は2005年7月2日に、二高校長室で行なわれ、宏さんから柏葉浩明校長に一括して贈られた。これは、北社会や同窓会HPで、既にお知らせした通りである。

実は、これに追加して、同年12月5日に、渡辺家所蔵の古文献3点が二高に贈られていた。この件は、このHPでは未発表だったので、触れておきたい。

この3点は、いずれも、蔵王遭難に関わるものだった。

「蔵王山遭難顛末報告書」が2通。その一通は、遭難直後の1918年10月の日付入りで、63ページに及ぶ。もう一通は一か月遅れの11月の日付で45ページ。いずれも謄写版刷りである。学校側が、当時の県庁と文部省に提出した

顛末書の校長控えと思われる。この二通によると、修学登山隊の一行は 10 月 22 日に青根温泉に宿泊。翌 23 日朝 6 時 30 分に、一行 151 人が 4 小隊に分かれて、宿を出発。気温 12 度、東風 1 メートル、曇り。「天候は平穩、危険なし」と旅館主。案内人も「晴天であらざるも、大丈夫なり」と言う。9 時に地蔵滝着、休憩 30 分。出発後、小雨が降り出す。「降ってきますが、風がなく仕合わせです」と案内人。11 時に刈田岳に到達、15 分休憩して、昼食。そして、11 時 50 分に熊野岳に登ったところで、「風雨強烈にして、休憩不可能なりき。休憩地点を捜しつつ下れり」とある。

そして、ワサ小屋に着いた時、「案内者ここより帰る」「ワラジ替えのため 20 分停滞」という記述も。そして、地蔵岳を右に見ながら、熊野岳より 32 町（1 時間半余）の 13 時 30 分の地点で、人員点呼し、はじめて落伍者がいることに気づく。50 分、未着者を待ったが来ない。風雨やまず、寒気が強まり、そのまま歩き出し、16 時 10 分に山形・高湯に着いている。

二通の顛末書には、一行の径路略図や、遭難地付近の地形図も添えられている。そして、涙を誘うのは、二つの遭難現場で発見された犠牲者の遺体の様子が、イラストで描かれていることである。教諭が両脇に、しっかり生徒を抱えている姿は、師弟愛の極みと言わざるを得ない。

そして、もう一通は、渡辺校長の命により、現地に急派された教諭の報告書で、11 月 3 日の日付、20 ページにわたる。これも克明な記録である。

これらの 3 通に、仔細に目を通せば、二中・二高百年史などの記述にはない、遭難の新事実が発見されるかも知れない。渡辺宏さんによると、まだ遭難関係の資料が家に残されているという。整理がつき次第、さらに追加して、二高側

に贈りたいとのことだ。

もう88年も昔になる、蔵王の悲劇だが、風化させてはなるまい。結果責任を負った一校長の辞任だけで、一件落着とされていいのだろうか。この遭難には謎が多く残されている。なぜ、寒波が迫りつつあるこの時期に、敢えて修学登山を決行したのか？それには、もしかしたら、外圧があったのか？現地での実際の指揮権は、いったい誰が握っていたのか？なぜ、天候急変の中、山に詳しい案内人を帰してしまったのか？なぜ、案内人は引き返す途中で、後続の遭難者と出会わなかったのか？-----などなど。当時としては、真相究明が難しい、時代背景があったのかも知れない。あるいは、渡辺文敏校長は、真実を突き止めた上で、それを、すべて胸にしまい込み、墓場まで持って行ったのかも知れない。

これらの古文献が、真実を解き明かす鍵の一つになっていることは確かだろう。報告する側が活字にできなかった想いを、行間から読み取る必要もあるのではないか。後世に解明を委ねるためにも、母校には、大事に保存していただきたいと、切にお願いしたい。

以上